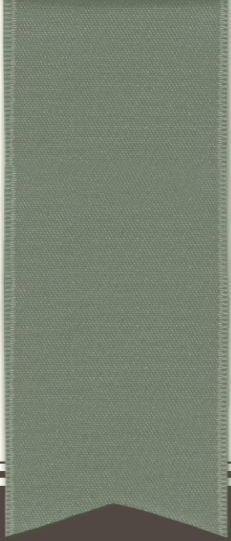


いちよう塾 江戸儒学思想史の概略 その1（儒学とその伝来）

多摩大学経営情報学部 高橋恭寛
2025年4月15日





本日のお題

1. はじめに
2. そもそも「儒学」とは何か
3. 儒学の日本伝来
4. 江戸時代の不安定な位置
5. 林羅山について
6. おわりに

1. はじめに

- 東アジア諸国は、儒学思想の伝統がある、と言われることがある。
- ただ、その際、想定されている「儒学」は、人それぞれ。
- 当然、日本でも「儒学思想」が活用されたが、当然、一様ではない。

1. はじめに

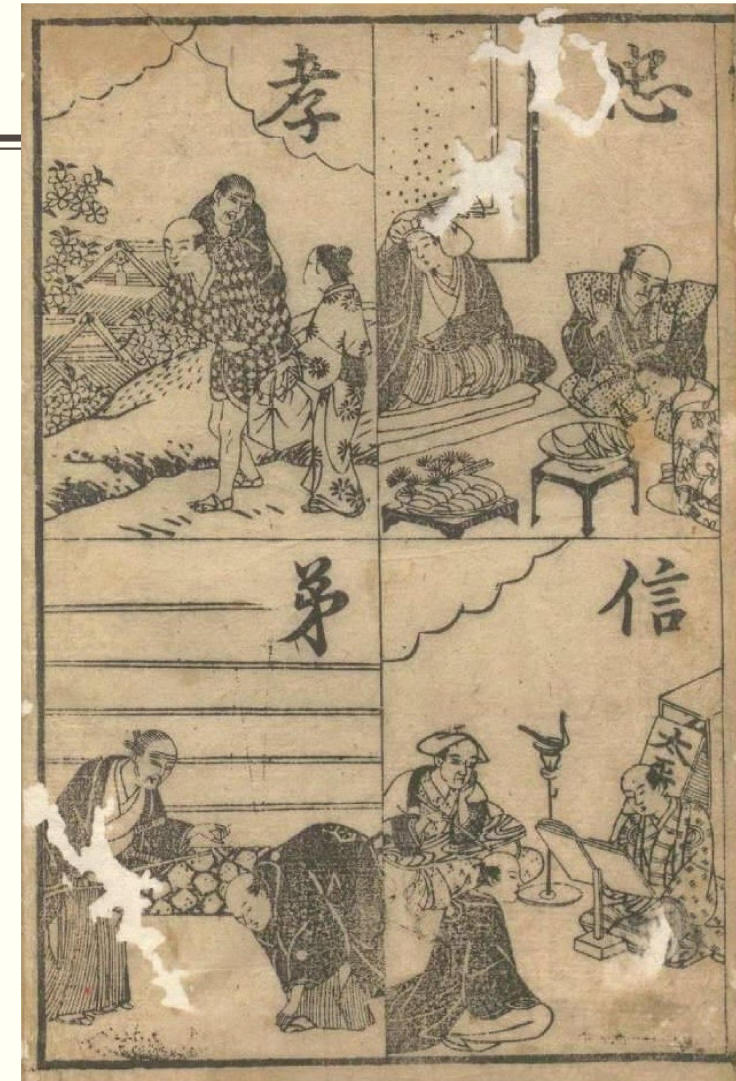
- 庶民道徳「家職大事」
 - 「正直」「忠孝」「堪忍」のような、所謂「通俗道徳」。
 - それらは「儒学」に基づくとはいえない。



脇坂義堂「撫育草（そだてくさ）」上巻扉絵（国立国会図書館蔵）

1. はじめに

- 「孝悌」「忠信」などは、儒学思想に基づくか？
- 儒学經典の講読や、専門的な儒学思想の解釈は、少々高度な学び。
- 庶民道徳における儒学思想の広がり、限定的。



1. はじめに

- 『論語』衛霊公第一五

「君子なるかな蘧伯玉。邦に道有らば則ち仕へ、邦に道無くんば則ち巻きて之れを懐（ふところ）にすべし」

➤ 蘧伯玉は君子だなあ。国に道があれば出仕し、国に道が無ければ、自らの才能をふところに隠して去る。

1. はじめに

- 『孟子』梁恵王下

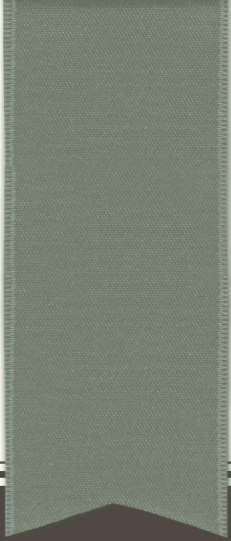
齊の宣王が言った「臣下がその主君を弑する、よいのだろうか」

孟子は言った「仁を損なう者を「賊」と言う。義を損なう者を「残」と言う。残賊の人はもはや主君ではなく「一夫」と言う。一夫という普通の男たる紂が武王に倒されたとは聞いているが、臣下が主君を弑したということは聞いていません。」

➤ 『孟子』には、革命思想がある。儒学思想には、所謂“上下の分”みたいなものだけではなく、上の立場へと切り込む主張を有する。

1. はじめに

- 2000年以上前から存在した教えであり、様々な時代や地域での継承を経ている。
- そのため、儒学思想と一言で言っても多面的。
日本でも、当然、この列島の時代や環境に合わせた受容がある。



2. そもそも「儒学」とは何か

儒学について

- 政治思想 兼 道徳思想

- 「仁愛の心」(他者への思いやり)と「礼秩序」によって、国内政治がうまくいくという主張。

- 春秋時代は、王権が弱くなり、重臣による専横や下克上が多発。周王朝が定めた「礼」が崩れている、という問題意識。
- したがって、周王朝を中心とする「秩序」(=儀礼や道徳意識も含む)への立ち戻りが、現在求められている。(唐虞三代の道)

儒者について

- 『論語』雍也第六

子、子夏に謂ひて曰く「女“君子儒”と為り、“小人儒”と為るなかれ。」

- 『周礼』には、「四曰儒、以道得民」(天官冢宰)や、「四曰聯師儒」(地官司徒)など、官職のひとつとして「儒」の語が見える。

→清代の孫詒讓『周礼正義』「儒とは、詩書を誦説し術芸に広く通ずる者を広く指している云々」とあるように、詩書の学者が「儒」だった？

- また、「巫祝」(シャマン)のことを指すという意見も。
→白川静・加地伸行など

儒者について

- 『孟子』滕文公上

夷子は言った「儒者の道は、古人の『赤子を養うようなものだ』と。これはどういうことか。愛に差別はなく、ただ実際に施すには親族から始まる。」

- 『孟子』尽心下

孟子曰、「墨から逃げたものは、必ず楊に帰す、楊から逃げた者は、必ず儒に帰す。儒者の道に来たらこれを受け入れるだけだ」

『墨子』非儒下

儒者は儀礼と音楽とを煩雑にして人々を奢侈にし、長い喪とうわべの悲しみとで親を欺いている。また定命を信じ貧窮に甘んじて、傲然たるふるまいを高尚なこととし、政治の根本に反し仕事をすてて、怠惰傲慢に流れる。

また飲食をむさぼり、仕事をおこたる。そして飢えとこごえにおち入り、凍死餓死にせまられてもこれを避けられず、まるで乞食同様である。……その様子を笑うと、儒者は怒って言う「無用の者にわれら良儒のことがどうしてわかろうか」と。

彼らは夏の間は麦などの食糧を物乞いし、五穀がすっかり刈りとられると、大家の喪の手伝いにでかけ、一族がみなつき従い、飲食にみち足りる。数家の喪を治めおわると、それで生活がたつ。彼らは他人の家や田畑に頼って飲食をしているのである。人の家に喪事があると、大よろこびで言う、衣食のもとができた、と。（『新釈漢文大系 墨子 上』より）

孔子の教え

- 「仁」と「礼」を重視。
すなわち、自分自身を道徳的に高める道徳思想であると同時に、適切な統治主体として礼秩序（ひいては社会秩序）を取り戻すことを求める。
- 最終的には、心の放逸でもなく、外的秩序への単なる従順でもない、両者がうまく一致した境地に至る。

孔子の教え

■ 『論語』顔淵第十二

顔淵は仁を質問した。先生が言われた、自分に打ち勝って礼に戻れば仁だ。みなが一日でも自分に打ち勝って礼に戻れば、天下はみな仁に帰着する。仁を行うのは自分なので、人にしてもらうものではない。

■ 『論語』為政第二

七十になって心の欲する所にしたがって、矩を踰（こ）えない。

孔子の教え

- 『論語』述而第七

子、四を以て教ふ、文行忠信。

➤ここでの「文」は、詩書礼。

「行」は徳行。忠・信は、自・他それぞれへの誠実さ。

（忠誠心の意味ではない）

孔子の学問

- 『論語』述而第七

先生が正しい発音で読まれたのは『詩』と『書』と『礼の実践』であり、これらはみなもともと正しい発音で読む書である。

- 『論語』泰伯第八

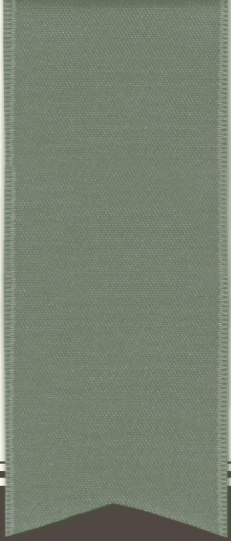
先生が言われた。「詩の学修から始まり、礼の講習で一人前になり、音楽の修得で完成する。」

『論語』と「孝」について

■ 『論語』為政第二

子游孝を問ふ、子曰く「今の孝は、是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで、皆な能く養有り。敬せずんば、何ぞ以て別たんや。」

- ただし、現代の通俗的な「親孝行」とイコールではない。
- 祖先儀礼と子孫への継承という宗教的な問題や、血族観。このあたり日本とは異なる。



3. 儒学の日本伝来～日本史の復習～

儒学の伝来

- 応神天皇15年のとき、百済王が派遣した王仁が『論語』と『千字文』（漢詩文だが早くから漢字の教科書となっていた）を持って来た。
- 513年（継体天皇7年）、554年（欽明天皇15年）のときに、百済から五経博士を派遣してもらっていた。610年（推古天皇18年）に高句麗から来日した曇徴という僧侶も五経を学んでいた。
- 遣隋使として隋に留学していた僧侶の旻（みん）は、仏教以外に『易経』を中臣鎌足に講じたという伝説もある。

律令体制での儒学

- 「大学」の設置

天智朝の初期は、役人養成機関としての「大学」があった。ここで儒学を教えていたという話。藤原武智麻呂が大学頭になった、という話もある（『藤氏家伝』）

- 式部省大学寮の学科として「明経道」が立てられる。後に、清原・中原氏が家学として継承。

衰退する明経道

- 平安時代は、儒学よりも、詩文や歴史書のほうが人気。
- そのため、奈良時代半ばごろから文章博士が独立し、詩文・歴史書を学ぶ紀伝道も登場。そっちが優遇されるような事態になっていった。
- 科挙の無い貴族社会においては、儒学を積極的に学ぶモチベーションは無い。

平安貴族の学力

- 1134年、左大臣藤原家忠だが、新任の参議・藤原実衡の「衡」の字を忘れて、関白藤原忠通に尋ねたらところ、「ゆきの中の魚」と教えられた。「雪」の字に魚の字を書き入れようとしたが、そんな字もないので、ただ黒字にしておいた。(古事談)

中世の儒学

- 儒学学習者は、平安貴族から禅僧へ。
- 室町期には、中国明朝への留学僧が帰国して、新儒学（すなわち朱子学）を日本にもたらした。
- 禅僧も『大学』『中庸』なども読むようになったが、禅僧にとっては、「**助道の一**」。「**外侮を禦ぐ**」ためのもの。
- 義堂周信「仏教は儒教を兼ね得れども儒教は仏教を兼ねるを得ず」（和島芳男『中世の儒学』77頁）

禅僧以外での、儒学の「活用」

- 一条兼良『日本書紀纂疏』の儒仏神三教一致の註釈書。
 - 清原宣賢の新旧注の折衷。
- ただし、彼らが、どこまで、体系的な儒学思想を活用していたのか、また、朱子の新注を組み込んでいたのか、さだかではない。

田村航「一条兼良の朱子学受容」 (『一条兼良の学問と室町文化』、勉誠出版2013)

(一条)兼良の学問といえは、神・儒・仏の三教一致論が説かれて久しいが、かならずしも 彼独自のものではなく、主として禅林間における共通認識というべきもので、その淵源は宋朝・元朝にもとめられる。兼良の経学、とくに宋学も同様で、たとえば朱注の末疏類への依拠は元来禅林に負うところが多い。(148頁)

- その一方、田村氏は、兼良が『礼記集説』中の朱注を採用して、有職故実に関する礼説を解説していることから、新たな兼良の朱註(新注)受容の側面を明らかにする(同書)

江戸期の儒学

- 日本の戦国末期から江戸時代前期というのは、中国においては「明末清初」という時代にあたる。
 - 1644年に李自成によって北京陥落。明朝滅亡。
- 13世紀宋代の「朱子学」や、15世紀明代の「陽明学」や、17世紀において儒仏道の様々な思想が入り交じって展開した「明末清初」の書籍（林兆恩（1517-98）などが代表例）が流入した時代。

藤原惺窩の登場

- 藤原惺窩（ふじわら・せいか、1561-1619）。元々は、京都相国寺の僧侶であったが還俗。
- 仏教を退け、はじめて儒服を着て「儒」であることをアイデンティティとして表明した。
- 「禅仏教の副教材としての儒学」からの脱却が、江戸儒学の始まり。



禅仏教からの離脱

- 中国南宋の朱熹が大成した朱子学自体が、禅仏教の「心で心を修む」というのに対する手立ての無さからの反発がきっかけで成立した（面がある）。儒学と仏教の魔合体。
- 室町期は、注釈書・参考書のひとつとして、儒学経典・朱子学注釈書が使われていたイメージ。
- 仏教を厳しく批判することで、そこからの独立をはかる。

林羅山の位置

- 林羅山（はやし・らざん、1583—1657）。名は信勝。京都建仁寺で学んだが、還俗して朱子学を唱える。
- 将軍家の侍講。徳川家康の側近として、外交行政文書作成・史書編纂などの文事にたずさわる。その後、羅山の子孫は、「林家」として幕府教学に携わることになる。
- ただし、公的に仕える存在は、坊主のみ。剃髪して、「林道春」と称する。



儒者なのに坊主？

- 1629年に「民部卿法印」に叙せられる。
法印＝僧位：法印大和尚位(かしょうい)の略
- 徳川家に仕えて、最初、上野の忍岡に土地を賜り、私塾と聖堂を作って儒学教育と儒礼実践の場とした。
- その後、湯島へと移り、現在の「湯島聖堂」が出来上がる。



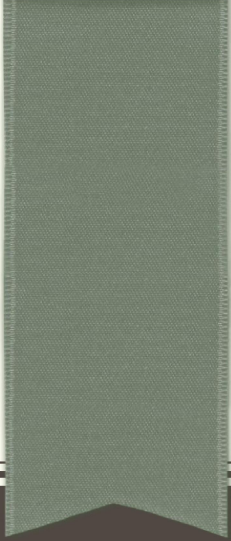
羅山＝「朱子学」＝封建思想？

- 衣笠安喜「第一章 朱子学と幕藩制社会」（『近世儒学思想史の研究』法政大学出版局、1976）

羅山にとっての朱子学は、全国的覇権を勝ちとった幕府権力の粉飾、ないしはできあがりつつある幕藩支配体制のあるべき姿を、統一権力の立場から示す思想であったことによるものであった（59頁）

現実社会の秩序を説明する儒学

- 羅山が、徳川家支配の正当性について、朱子学を用いて説いたことは事実。
- しかし、それが封建イデオロギーとして幕府が利用したかどうかは別問題。羅山はそもそも徳川家顧問に過ぎない。
- 朱子学が「官学」になるのは、昌平黌（昌平坂学問所）が幕府直属になった寛政改革以降のこと。それまで非常に影の薄いものであった。



4. 江戸時代の不安定な位置

松浦静山『甲子夜話』卷四第46条（東洋文庫『甲子夜話Ⅰ』）

明安の頃、節儉の政令厳刻なりしとき、其旨を希ひし作事奉行より、「昌平の聖堂は第一無用の長物なれば、取崩し然るべし」と建言せしを、国用掌れる老職、水野羽州聞届て、既に高聴に達せんとして、御用取次衆へ申けるに、取次衆、聖堂と云もの何なることを知らず。奥右筆組頭大前孫兵衛に、「聖堂安置あるは神か仏か」と尋ねしかば、大前、「たしか本尊は孔子とか云ことに候」と答えければ、取次衆、「其孔子と云は何なりや」と又尋ねければ、大前、「『論語』とか申書物に出候人と承り候」と答けるに、取次衆打うなづきて、「嗚呼それにて分りたり、道理で聖堂崩しの沙汰を聞て、林大学頭が、唐へ聞へても御外聞がわるゐと申たりと聞及びぬ。さらば先暫見合せ置型なるべし」とて、高聴に達せず。（53頁）

幕府役人クラスでも無学

- 明和・安永の時代「湯島聖堂」が何なのかよく分かっていないので、取り潰すべしという意見が出る。
- 聖堂に安置されている「孔子」の存在、『論語』という書籍についても、中央の役人たちは何も知らず、奥右筆(文書係)に問い合わせる始末。

申維翰「日本聞見雜録」(東洋文庫『海游録 朝鮮通信使の 日本紀行』)

○国に四民あり、曰く兵農工商がそれである。士はあずからない。……四民のほかにも、別に儒学、僧徒、医学がある。……儒者は、学ぶに詩文をなすが、科挙試による仕進の路がない。ゆえに、ようやく声誉を得たところで、各州の記室にとどまる。(300頁)

外から見た武家社会

- 朝鮮通信使から見れば、「武士」は、「士」（※士大夫）ではなく「兵士」。
- 科挙が無いので、世間一般に儒学学習のモチベーションが存在しないことも指摘されている。
- 中国や李氏朝鮮の科挙官僚と徳川の武士とは、全く異なる存在。

申維翰「日本聞見雜録」(東洋文庫『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』)

けだし、その人心と習俗が、すべて孫武、穰苴（※高橋：孫武と司馬穰苴は、いずれも中国春秋時代の兵法家）の軍の如くであるが、これは、礼教があつてかくの如くに治まったものではない。国君と各州太守の政がもっぱら兵制から出ており、大小の民庶が見て習ったのも、一に軍法の如きものである。（302頁）

かくのごとく……

- 儒学に基づく、礼秩序があって、治まっているのではない。むしろ、戦国時代からのなごりか、「軍法」に基づく秩序構成だ、と朝鮮儒者からは喝破されていた。
- この、兵営国家としての徳川幕府、という話を思想史的立場から切り込んだのが、前田勉『近世日本の儒学と兵学』（ペリカン社、1996）。
- 儒学教育は、武家社会に一般的ではなかった。

江戸初期の武家において

■「黒田長政遺言」

『日本思想大系 近世武家思想』岩波書店、1974)

四書五經孝經、素読能覚候はゞ、道雲（※林道春のこと）折々呼び道理を聞、
国之仕置素直に、非道無_レ之様に学問を用ひ候事、第一にて候。多物を
読物知りだてにて、“こばし名聞”に成候ては、人之異を譏り申為之様に
心得候へば、学問も邪魔に成候。何事も用ひ様にて、好きとあしきとに成
候事。（20頁）

全否定しているわけではない

- さすがに黒田長政ぐらいの大名クラスになると、学問を学んで国政に資する何かがあるという立場を取る。
- 「こばし名聞」とは、知ったかぶりをして生意気になる人。勉強しすぎて生意気になっても仕方が無い。ほどほどがいちばん。



儒者が目指す、武士の「士道」

- 朝鮮儒者には「サムライ」は「士」ではないと喝破された。
- 他方、日本の儒者は、武家が儒学的素養を有した「士」となることを願う。

『山鹿語類』士道篇

凡そ士の職と云ふは、其の身を顧ふに、主人を得て奉公の忠を尽し、朋輩に交はりて信を厚くし、身の独りを慎んで義を専らとするにあり。而して己れが身に父子兄弟夫婦の不_レ得_レ已交接あり。……士は農工商の業をさし置いて此の道を専らつとめ、三民の間、苟も人倫をみだらん輩をば速やかに罰して、以て天下に天倫の正しきを待つ。是れ士に文武之徳知不備ばあるべからず。

統治者としての武士に必要な儒学

- 山鹿素行は、「統治者としての武士」に対して、統治者であることを自覚し、儒学的徳目の獲得と、朱子学的修錬を求める。
- ただし、これは当時の武士を前にして、「儒」の立場からの理想的な統治者像に過ぎない。

比較：『葉隠』の場合

『葉隠』（巻1第195条）

忠の不忠の、義の不義の、当介（※宛行）の不当介など、理非邪正の当りに心の付がいや也。無理無体に奉公に好き、無二無三に主人を大切におもへば、夫にて澄（ママ）こと也。

『葉隠』も、泰平の時代の書

- そもそも「武士はいかにあるべきか？」という知的反省や主従関係の背後にある哲学的要素などは、「理屈」として退けられる。ひたすらの忠義。「死に身」となる
- ただし、『葉隠』の話者・山本常朝も泰平の世の人であり、これもまた「あるべき武士」の理想を描き出したものに過ぎないという点には注意。

近世社会における道德

- 武士階級に限らず、近世社会においては、それぞれの社会的地位に応じた職分(=仕事)と責任がある(これを「**役**」という)。
 - その役割を全うし、後世へと繋ぐ。先祖代々の家業を全うすることが、所謂「正しい生き方」とされた。
- これが、尾藤正英のいう「**役の体系**」。
(尾藤正英「江戸時代の社会と政治思想の特質」『江戸時代とは何か』岩波現代文庫、2006)

なぜ学ばないのか

藤井懶斎「閑際筆記」

(『日本随筆大成』第1期第17巻、吉川弘文館)

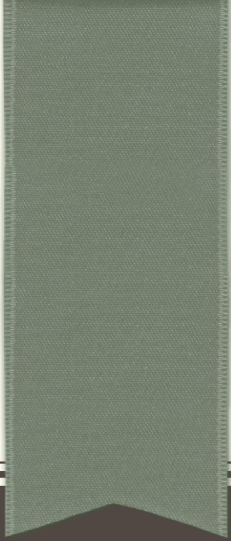
国君郡主の儒学を好む者、多くは皆な久しからずして廃つることは何ぞや。礼文、其の身を檢束するに苦しむ、一なり。衆欲遂げ難き、二なり。異政の上に聞ゆるを憚る、三なり。諸臣之を厭ふ者衆くして勧むる者寡し、四なり。武事怠緩の嫌ひを避く、五なり。(248頁)

武士が学ばない理由に納得？

- 1. 儒学的な礼節に拘束されるのが辛い、2. 諸欲も抑えられない、3. 舶来の政治思想だと聞こえも悪い、4. 家臣も学問を嫌うので勧めてこない、5. 武事を怠りがちになるのを避けたい。
- 言い訳がましいところもあるが、当時の武家が儒家の学問が堅苦しい文事だと思っていたことが、窺い知ることができる。

武家社会の中の林羅山

- 林家は、徳川将軍家に文事を以て仕えたとは言え、現実問題として、武家社会において「儒学学習」は、寛政改革による聖堂改革を迎えるまで、ほとんど一般的ではなかった。
- ただ、林羅山は、家康の傍に仕えながら、儒学の「学校」の建設をお願いしていた。実現に動き始めたタイミングで、大坂の陣で中止→家康死去。



5. 林羅山について

武家社会の中の林羅山

- 羅山が徳川将軍家に仕えたとは言え、現実問題として武家社会における「儒学学習」は、寛政改革による聖堂改革まであまり日の目を見なかった。
- 羅山も、家康の傍に仕えながら儒学の「学校」の建設をお願いしていた。実現に動き始めたタイミングで、大坂の陣。

羅山の挫折

- 『羅山文集』巻八（ペリかん社、102頁）

余が如き者、草木と同じく朽ち、瓦石と齊しく棄てらる。天地の間の一廃人なり。円鑿方柄、時に遇はず。

- 羅山は、みずからを、時代を得ることが出来なかった「天地の間の一廃人」と自己のことを表現している。
- とは言え、将軍側近として文事を掌るようになる。

外交における活躍

- 明やルソンなどへの外交文書の作成。
さらには、朝鮮通信使との筆談によるコミュニケーションを担当。朝鮮国王への返書も起草。
- 金地院崇伝なども外交文書作成に関わっていたが、次第に林家の仕事、ということが定まっていた。

外交における活躍

- 禅僧（五山僧侶）が外交を担っていた中世日本から変化し、儒学を正式に学んだ「儒者」が外交を担当するという流れを作る。（羅山たちは、慣例で坊主にされたが……）
- ちなみに、幕末の開国交渉でも、林家は交渉に一枚加わっていた。

法令など公文書作成

- 1615年、幕府は『武家諸法度』を制定。金地院崇伝が中心となり起草。
- 1635年、家光の時代に『武家諸法度』が改定。同年、『諸士法度』も制定。両方とも、林羅山が中心となり起草。
- 1635年の改定時は、諸大名や旗本を前に羅山が読み上げて公布。法令の起草にも、禅僧よりも儒者が一枚噛むようになる（ただし、政治運営には噛んでいない）。要するに秘書官。

林家の中心的事業、歴史書編纂

■ 『寛永諸家系図伝』の編纂

- 1641年、幕府は、大名や旗本の家系を明確にするために編纂を開始。各家から諸系図などの提出を命じて編纂。
- 林羅山が総責任者となる。息子の鷲峰や読耕斎、門人、五山の禅僧などのチームを率いて編纂。

『本朝編年録』の編纂開始

- 1644年、幕府は、通史の編纂を開始。羅山に命ずる。
1651年に宇多天皇までの通史を完成させ、一旦提出。
 - その後、家光も羅山も相次いで死去したため、通史編纂は停滞する。
- その後、羅山の死後、二代目の林鷺峰が続編の編纂を進言して許可を得る。通史編纂の事業を再スタートさせ、1670年『本朝通鑑』が完成。

羅山の仕事

- 幕府の文事とは、歴史編纂などのことを指す。政治や教育自体に介入できたわけではない。
- 羅山は「従俗の論理」で受けとめた、と評される。
武家社会の現実と戦いながら、忍岡の私塾で儒学振興をはかり、機を待ち続ける。

「従俗の論理」

■ 石田一良「林羅山の思想」

(『日本思想大系 藤原惺窩 林羅山』)

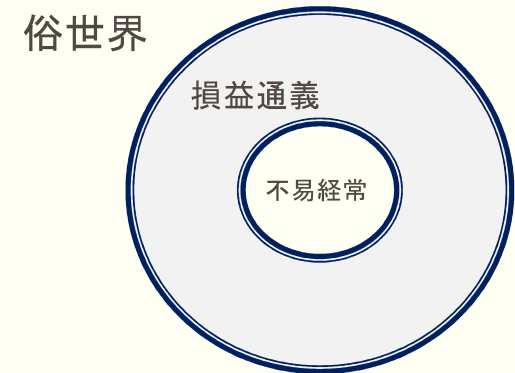
羅山の周辺には異端の仏教によって代表される俗なる世界が、抗し難い勢力で取り巻いていた。……俗世界において、俗に順っても、俗の心になるのではない、外は俗習の形に順いながら内には儒の心を保つ、これが羅山の「従俗の論理」であった。

(483～485頁)

- 表向きは、「俗」(俗世界)にしたがう。しかし、その世界の核心には、変わらぬ「理」の世界が存する。

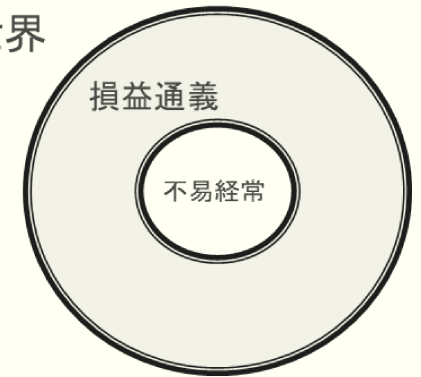
「従俗の論理」

即ち彼の世界は、……中央に「不易經常の世界」がある。その外側に「損益通義の世界」がある、綱常を時と世に適応させて適宜に加減する世界である。この二つは儒道の聖なる世界を構成する。この世界の外側に広大な俗世界が広がっている。彼にとっては、「従俗教化の世界」である。彼は「損益の世界」を「従俗の世界」に拡大し、俗世界を聖教によって教化し尽そうと努力したのである。(483頁)



「従俗の論理」

俗世界



- 不易經常の世界は、普遍的な儒道の核心部。
- 「損益」とは、『論語』に出てくる語。古代の礼も、取捨選択されながら現代に至って存在する、という話。損益通義の世界とは、時代に応じて変化・更新される儒道の部分。
- 儒学に基づく根本的な世界観・哲学は、揺るがず核に存在する。俗世界は俗世界で、教化の対象。

中江藤樹による羅山への批判

■ 中江藤樹「林氏剃髪受位弁」

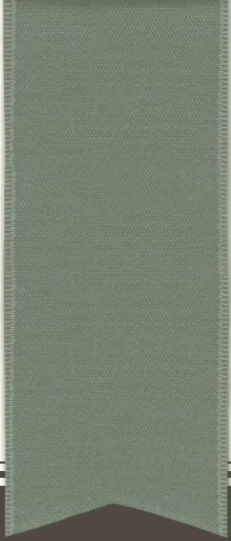
（『日本思想大系 中江藤樹』岩波書店）14・5頁

其の髪を剃除して髻（もとどり）無きは、仏者の頭容なり、国俗に非ず。……今仏者の形に肖（に）せ、仏者の位に居り、仏者の服を服する者は、之を如何とか謂わん。仏者のみ。

- 中江藤樹は、このとき24歳。「俗に従う」と言って坊主の体をとった羅山が、若き藤樹には、文章にして後々まで残しておくほど許せないことであつたようで……。

話を元に戻して、羅山ファミリー

- 役人や政治主体としての「儒者」が求められたわけではない。
- 羅山は、儒学振興のために「従俗の論理」で戦うが、ファミリー誰もがそうではない。
- 四男、林読耕斎も朱子学者として、父・羅山や兄・鷺峰の歴史編纂の仕事を手伝いつつ、自分は『本朝遯史』（1660年自序）を完成させる。『本朝遯史』は、日本の隠者51人の伝記。



6. おわりに

おわりに

- 以上のように、中国から伝来した儒学思想の始まりから、それが日本列島に受容されたところをフォーカスしてきました。
- 早い段階で「学問」として広まった面もあり、それ自体、長く受容されてこなかった。
- 身分制社会の徳川時代においても、なかなか学問として受け入れられない状況であった。

おわりに

- しかし、徳川時代にも「儒者」として独立して儒学思想を重んじようとした人々があらわれる。
- どのような意義を儒学思想に見出していたのか。そして、それを当時の日本列島において受容できるものとして取捨選択していったのか。
- “学問のいらない社会”に学問の意義をどのように説いたのか。